

「近世草梁倭館における蘭出・打擲事件をめぐる日朝交渉 —天明六年の蘭出・打擲事件を素材として—」

小堀 槇子

A negotiation between Japan and Korea about “Ranshutsu (蘭出)” and “Chochaku (打擲)” incidents on the Choryang Wakan in the early modern period

KOBORI Makiko

Abstract

In the early modern period of the Japan-Korean relations, Tsusima Han (対馬藩) which was delegated from the Shogunate to negotiate with Korea and also approved to trade with the country, in substance had played a role as a relationship window of Japan for Korea.

After the Japanese Inbations of Korea, Korea had been coutinous about traffic movement of Japanese people to their territory, as so limited those living inside of the “Choryang Wakan” (草梁倭館). Because of this, Tsusima’s officials for negotiations and trade had become connecting with officials from Korea, living in Wakan. In the field of Wakan, there had been always five hundred Japanese people; officials from Tsusima including the head manager of Wakan, merchants and servants working under the residents of Wakan.

In this article we concider how Tsusima and Korea had corresponded and positioned to two incidents which happened in 1786, the one is going out of Japanese from Wakan, and the second is a dispute between Japanese and Koreans, aiming to declare how Wakan could be placed in the Japan-Korean relationship, and having awareness of the issues of how Korea and Tsusima had considered Wakan.

This article also will discuss how Korean officials had been recognized Wakan through analyzing discussions in the imperial court of Korea.

According to avobe analysis, this article claims that The Korean government had been recognized fields around Wakan as “border region” again Japan, on the other hand, Tsusima Han agency used to attempt to reduce influence of the two incidents through handling them within Wakan.



目次

はじめに

第一章 天明六年倭館における闖出・打擲事件

第一項 事件の発生

第二項 倭館における事件の詮議

第二章 闖出・打擲事件への対馬藩の対応

第三章 闖出・打擲事件への朝鮮の対応

第一項 開市の停止

第二項 朝鮮における倭館の辺境認識

第三項 「易地聘礼」交渉における倭館の弊害論

おわりに

はじめに 問題の所在

近世の日朝関係においては、幕府から朝鮮との交渉を任せられ、交易を許可された対馬藩が実質的には日本の窓口としての役割を果たした。壬辰倭乱を経験した朝鮮は、日本人のソウルへの往来を警戒し、釜山に設けた倭館に限って日本人の居住を許可した。このため対馬藩から派遣される朝鮮との交渉や交易にあたる担当者は、倭館に滞在して朝鮮側の役人と折衝した。倭館には、館内の統括を担う館守をはじめ対馬藩の役人が居住し、それ以外にも「請負商人」と呼ばれる町人や、在館者の身の世話をする下働きの者らが常時五百名ほど滞在していた。

日朝関係の研究史は、外交交渉^一や密貿易^二そのものを検討対象とする研究^三から始まった。倭館に焦点を当てた研究としては、田代和生氏が倭館での日朝の交易活動や日本人の生活の実態を明らかにしている^{三〇}。

延宝六（一六七八）年に釜山の豆毛浦^{トモモリ}から草梁^{クサリヤン}に移転した倭館は、

その南西付近に草梁村という朝鮮人集落があり、日本人と朝鮮人が容易に接触できる状況にあった。また、倭館内外で開催される「開市」や「朝市」では、朝鮮商人や倭館周辺に居住する朝鮮人が多数参加して日本人と取引したため、密貿易や商売をめぐるトラブルの発生につながっていた^四。このように日朝両国人の接触の場となった倭館では、交奸（日本人と朝鮮人女性の姦通）や喧嘩・打擲などの事件が発生しており、孫承詒氏^五やチャン・スンスン氏^六の研究により事件の実態が明らかにされてきた。

こうした日常的な倭館での事件を問題視した朝鮮は、倭館の統制を目的とした「約条」の締結を対馬藩に要求した。尹裕淑氏^七は、一七世紀半ばから一九世紀半ばにかけて日朝間で締結された「約条」を検討し、倭館の問題について朝鮮政府と対馬藩がどのような統制・管理を行ったか具体的に明らかにしている。天和三（一六八三）年の「癸亥約条」では密貿易と闖出（日本人の規定範囲外への外出）を犯した日本人は死刑と規定され、正徳元（一七一）年の「辛卯（交奸）約条」では、朝鮮人女性と関係をもった日本人が状況により死罪・流罪と規定されるなど、朝鮮側が重視してきた倭館統制が成文化されていった。

また、倭館を管理する地方官東萊府使・権以鎮の建議により、宝永六（一七〇九）年に草梁の朝鮮客舎と倭館の間に「設門」が建ち^八、それまで倭館付近にあった草梁村を設門の外に移転したが、これは倭館の日本人と草梁村の朝鮮人の行動空間を分けて、交奸や密貿易を防ごうとするものであった^九。

近世日本において唯一日本人が外国に滞在した場所という点で倭館は特異な存在であった。また、朝鮮に渡るすべての日本人が倭館内に滞在することを義務付けられ、日朝間の交渉や交易が倭館内に限定されたという点も日朝関係の特質といえよう。先行研究では、倭館を通じて日朝の交渉や接触をみる視点から近世の日朝関係の実態が明らかにされてきた。しかしながら、日朝関係の両輪を成す朝鮮政府と対馬藩あるいは幕府がどのように倭館の存在を認識して、倭館を通じた日

朝関係を近世末期まで継続させたかということについては具体的に検討されていないと考える。

倭館の統制を目的とした約条の制定の後も、倭館内外における両国人の接触を完全に防ぐことはできず事件が頻繁に発生した。この理由について、癸亥約条の運用実態を分析した尹裕淑氏¹⁾は、約条の締結後に発生した密貿易や闖出事件に対する朝鮮政府と対馬藩の認識に大きな差があったと指摘する。約条の規定に従って違反者に死罪を適用しようとする朝鮮に対し、対馬藩は朝鮮の要求に応じず藩の利害に沿って処罪した。こうした対馬藩の消極的な対応もあって、約条は円滑に履行されたとは言えず、事件発生の抑制力にはなっていなかったとみられる。このように朝鮮の意図した倭館の統制と実際の事件に対する対馬藩の対応が乖離していた実態がありながらも倭館を通じて日朝関係が維持された背景には、両国のどのような倭館への認識があったのであろうか。この問いを通じて、日朝関係における倭館の位置付けを明らかにしたいと考える。

本稿では、一八世紀前半に「設門」が建てられてから約八十年後の天明六（一七八六）年に倭館で発生した日本人の闖出及び朝鮮人打擲事件を題材として、この事件に対する朝鮮や対馬藩の対応を検討し、倭館で起きた事件に対する姿勢を考察する。特に、対馬藩の執政を担う朝鮮御用支配については、これまで倭館との関わりがほとんど言及されてこなかったが、「毎日記」などの史料を用いて事件の裁許をめぐる対馬藩庁の意図を具体的に明らかにする。また、この事件は倭館を管轄する東萊府から朝鮮朝廷に報告されることとなるが、朝廷における議論から、朝鮮の官僚が倭館をどのように認識していたか明らかにしていく。

第一章 天明六年倭館における闖出・打擲事件

第一項 事件の発生

天明六（一七八六）年、倭館に滞在する複数の日本人が倭館付近の

朝鮮人が居住する村へ闖出する事件が発生した。日本人の闖出行為は癸亥約条で禁止規定があるうえ、今回の事件では闖出した在館者が朝鮮人を打擲し殺害したことが問題となった。本章では、事件の発生と倭館における詮議について具体的にみていくこととする。

事件は十一月九日に発生し、十一日に打擲された朝鮮人の死亡が倭学訳官（両訳）の訓導・鄭思鉦と別差・崔昌謙から倭館に報告された²⁾（傍線、句読点は筆者）。

【史料二】

（前略）

同 今ノ已刻頃大通詞吉松清右衛門・通詞小田幾五郎書役迄罷出候者、唯今両訳入館大庁へ参り申聞候者、①一昨日東西館下焚中炭柴催促として坂ノ下へ罷越候処、②小通事居合不申候付、際木を越し村家江罷越候而借錢有之者之方江行、房内江踏込朝鮮人を打擲せしめ候処今日相果候付、右之次第館守へ申出候ため致入館候段申聞候由、清右衛門・幾五郎ハ素五人通詞中迄も大庁へ罷出掛合候者、左成^{（後述）}治定扱も無之様之事館守へ被申出候時、決而御承引有之儀ニ無之、抑③一昨日九日二相果候もの二候へハ、兎も角も三日過候而相果候迎此方承ル儀ニ無御座と可被仰、其上翌日ニも何之訴も無之、既ニ夜前迄就御用別差ハ館守へ被罷出、緩々御掛合有之候処、右之朝鮮人死ニ至候程之事を即刻二可被申出儀ニ候処無其儀、今日二至右之段被申出候所存難心得次第二候、大二手拔有之候へハ、何分被申聞候迎我々方ハ決而館守江被申出儀ニ毛頭無之、若し申出候時必定右之通之事ニ而御取用ニ有之事ニ無之事と被存候、依之被引取候様申論し差返候段申出、右二付段々掛合有之候得共、爰ニ不記、（後略）

史料は、訓導・鄭思鉦らから倭館内の大庁において報告を受けた大

通詞・吉松清右衛門、通詞・小田幾五郎が、館守書役に会見の内容を伝えたものである。

訓導らは事件について、①「昨日九日に倭館の「下焚中」が「炭柴」支給の催促のため、倭館の北側にある訓導らの執務所「坂ノ下」へ押し掛けたことを報告した。事件に関わった「下焚中」は、館守・吉田彦右衛門の下人・善蔵、館守書役の下人・善助ら、倭館に滞在する対馬藩士の下働きとして渡海した者二十三名であった^{三〇}。彼らは倭館の日用のために朝鮮から支給される炭柴の催促のため朝鮮役人の執務所に向かったが、②下級通訳である小通事の不在により催促の交渉ができなかったとみられ、「際木」を越して朝鮮人の居住する村家に侵入した。天和三（一六八三）年の癸亥約条に「際木之外江曾而罷出間敷候」^{三一}という条文があるように、日本人が際木を越えて外出することは禁じられていた。日本人と朝鮮人の接触を問題視した東萊府使・権以鎮の建議により「設門」が建てられ、元々倭館の南西にあった草梁村という朝鮮人の村落が設門の外に移転し新草梁村と名付けられた。

新草梁村付近には、倭館に支給する炭柴を納めた「炭炭幕」があるため、設門を越えて闖出した下働きの日本人たちはここを目指したとも考えられる。その際に、新草梁村に立ち入り、村に居住する秋応徳という朝鮮人を打擲したという^{三四}。この秋応徳は「借錢有之者」であったようだが、倭館の日本人と朝鮮商人との取引における相互貸借関係は日常的に存在していた。長正統によれば、倭館における交易形態の一つである開市においては信用取引が行われ、品物を先に渡して対価を未払いにしている状態があったという^{三五}。こうしたいわば合法的な債務に対し、密貿易に伴った非合法的な債務は「路浮税（登セ銀）」と呼ばれ、先述の癸亥約条においても路浮税を犯した者に対する厳罰が定められている^{三六}。今回の打擲事件の背景に、どのような取引があったのかは明らかではないが、朝鮮朝廷に対しては秋応徳の「私相借貸」^{三七}と報告されていることから、私的な取引行為によるトラブルが発生していたことが推察される。

日本人から打擲を受けた秋応徳が死亡したため、訓導らは事件につ

いて館守に報告しようと来館したのであるが、大通詞らは「左成治定拠も無之様之事」を館守が取り上げないだろうと告げている。しかし、この交渉のなかで大通詞らは、③「昨日九日二相果候もの二候へハ、兎も角も三日過候而相果候迎此方承ル儀二無御座と可被仰」と、九日に秋応徳が死亡したことについて、十一日まで倭館へ報告がなかったことについて館守は承知しないだろうと責めているが、訓導らは十一日に死亡したと述べているので、両者に誤解が生じていた可能性がある。ともかく、事件の発生を知った大通詞らは、館守書役の久光市蔵を通じて、両訳との交渉の内容を館守吉田彦右衛門に報告した。

第二項 倭館における事件の詮議

事件発生の報告を受けた館守・吉田彦右衛門は、翌日一代官を呼び出して事件の詮議について意見を求めた。一代官・味木左兵衛は「内向御僉議被仰付如何哉」^{三八}と、倭館での取り調べを進言したが、館守は当面の取り調べは見合わせることにした。

翌十三日になると、倭館の大庁において開催される定例の開市が、「外向差支」を理由に中止される^{三九}。開市は、倭館の日本人と東萊府の許可を得た朝鮮商人によって取引が行われる場であった^{四〇}。対馬藩からの使者を接待した宴供と開市の開催は、対馬藩にとっては朝鮮との交易を行う機会であったが、後述するように東萊府や朝鮮政府は倭館での事件が発生すると、倭館館守らに事件の対応を求めて、宴供や開市の停止措置を取ることがあった。今回の事件でも、十一日に訓導、別差らが倭館館守に打擲された朝鮮人の死亡を報告したものの、通詞らの反応が鈍く、実際に事件の犯人を取調べるような動きもないため、開市が取り止めになったと推測される。

こうした朝鮮側の措置を受けてか、館守は闖出及び打擲事件の事実関係の調査を開始する。関係者の詮議と口書作成の命を受けた老頭によつて、十七日、松岡半左衛門配下の仙之助と畑嶋安右衛門配下の喜六が朝鮮人打擲の犯人として詮議を受け、「先主人預二申付、禁足之

形二而吃度相慎^{三二}と命じられる。しかし、仙之助と喜六は、二十日に行われた詮議でも白状しなかった^{三三}。

二十八日には、仮両訳らが入館して事件の詮議の状況について尋ねたので、館守は通詞・小田幾五郎らと共に面会に応じて、厳しく詮議をしているが未だ白状しない旨を東萊府使へ報告するよう伝えた^{三四}。

さらに同日、館守は二代官に命じて、主人預としていた仙之助と喜六の身柄を「罪状重キ聞へ之者主人預ニ申付置候而ハ朝鮮人見掛不宜」として、朝鮮人の目を避けて収監するように指示を出した^{三五}。朝鮮側が今回の事件について問題視していることを館守も認識して対応したものと考えられる。

翌天明七（一七八七）年の正月に入っても打擲事件の詮議が引き続き行われたが、正月二十二日に犯人の喜六が詮議中に死亡する^{三六}。喜六の死亡を受けてか、倭館ではこれ以上の取調べは行われず、二月下旬、残る仙之助と蘭出の関係者は対馬へ護送された。残る仙之助は、「縄下」として送られ、対馬に帰国後入牢を命じられる^{三七}。

一方、仙之介、喜六以外の蘭出に関わった在館者の詮議は、事件の発生から十日ほど経過した十一月十八日、倭館において行われた。彼らは対馬に帰島した後、城下の厳原府中に呼び出され、「朝鮮不埒之筋」のため禁足を命じられた^{三八}。

このように、今回の事件は、館中の下働きの者が日用の柴炭の支給催促を目的として蘭出した際に、仙之介と喜六の二名が商売取引のあった相手の朝鮮人・秋応徳を打擲し、死亡させたものであった。当初、倭館では詮議を日延べするなど、積極的に犯人を追及する意図はなかったと思われるが、開市の停止や朝鮮役人から詮議への干渉などの動きが見られたことで、犯人を厳しく取調べ、遂には自白を得られないまま喜六が死亡する結果となった。

第二章 蘭出・打擲事件への対馬藩の対応

事態を重く見た対馬藩の朝鮮御用支配は、事件の関係者の対馬への

帰国を命じて、裁許を下した。処分は蘭出・打擲に関わった在館者だけでなく、館守・吉田彦右衛門をはじめ倭館役人らにも及んだ。本章では、対馬藩年寄中のうち朝鮮関係を統括する朝鮮御用支配が館守らに下した裁許から、倭館における事件の発生についての対馬藩の姿勢を考察する。

次にみる天明七年二月六日の裁許により、朝鮮御用支配らは与頭に對して、館守・吉田彦右衛門、朝鮮横目頭・雨森友之進、大小姓横目・松原清蔵に差控を命じて、打擲事件の処置について責任を問うた^{三九}。

【史料二】

館守

吉田彦右衛門

御横目頭

雨森友之進

大小姓御横目

松原清蔵

右者①兩國御誠信之間ハ双方後弊を禁候段肝要之義候処、後弊与申内中二も重キハ人命ニ拘候筋二有之、②下賤之者共ハ元來不勘弁者共故、誠信茂後弊も不相構、只其時其場之怒り応し而打擲茂起候儀下々人情之常故、此所を双方深令勘弁、③後々兩國間之入組無之様兼々御制禁有之段、御誠信之根本此所二候、然処此頃④下禁共之内兩國之御制禁を心得驕傲放恣之所為相聞へ、其実於有之兩國御誠信之訳明白ニ相立候様嚴重之御仕置筋取斗方有之儀二付、⑤吟味方無越度様館守別而心を尽シ可申義勿論候処、糺明不相届内却而当人之者不慮ニ相果、言語道断之次第候、右之通当人相果候上ハ其事実を照シ外向江可被仰達道をモ失、無御本意次第残念之事二候、是畢竟館守其職を不尽、御詮議掛之役々越度故与相見候、不埒ニ付館守及御詮議人之内頭立候兩人先差控被仰付候、此旨夫々可被申渡越候、以上、

二月六日 年寄中

与頭衆中

朝鮮御用支配が館守らの処分を決めた背景には、①「両国御誠信之間ハ双方後弊を禁候段肝要之義候」と、朝鮮御用支配には日朝両国の誠信の間柄は、互いに「後弊」を禁じることが肝要という認識があったとみられる。なかでも人命に関わることは特に重大な問題であり、倭館での打擲事件が日朝の誠信関係に影響を及ぼすと考えていたようである。

しかし、今回のような蘭出・打擲事件を引き起こした館者たちは②「誠信茂後弊も不相構、只其時其場之怒り応し而打擲茂起候」と、その場その時の怒りにより打擲してしまう人々であった。これは「下々人情之常」であり、在館者たちは事件が後々引き起こす日朝関係の弊害について理解せず、制禁についても④「心得驕傲放恣」であることが事件の背景にあると、朝鮮御用支配は考えたようである。

続けて、朝鮮御用支配は、在館者に誠信や日朝関係への弊害を理解させて、③「後々両国間之入組」がないようにするために蘭出の禁止や交好約条などの制禁が定められたと述べている。つまり、倭館での蘭出や交好、打擲行為によって両国の交渉が発生することを避けることが「御誠信之根本」であった。

館守らは、⑤「吟味方無越度様館守別而心を尽シ可申義勿論候処、糺明不相届内、却而当人之者不慮ニ相果、言語道断之次第候」とあるように、打擲事件をめぐる詮議に落ち度があつてはならないところ、犯人を取調べ中に死亡させたことを咎められた。前章で見たように、犯人の喜六と仙之助は厳しく取調べを受けたが、自白を得られなまま喜六が死亡したため、事実を明らかにして「外向」すなわち朝鮮側の東萊府役人らに報告することが叶わなくなった。朝鮮御用支配は、倭館での事件の取調べに責任を負う館守、朝鮮横目らの対処に落ち度があるとして、吉田ら三名に差控を命じたのである。

このように、朝鮮との交隣関係における弊害を理解せずに事件を起こすとされていた在館者たちであったが、打擲事件の詮議が行われて

いた天明六年十二月に発生した、倭館の日本人と朝鮮人女性との交好事件では、少し事情が異なっていた。

交好事件は十二月二十四日朝方、倭館より石垣を越えて逃げようとする朝鮮人女性が捕えられたことで発覚した。東萊府の取調べにより、この女性は東萊に居住する徐一月で、高甲山という人物に誘われて倭館に潜入したことが判明した^{三〇}。徐一月が相手の日本人の名前を白状したため、別差は大通詞・吉松清右衛門らを通じて倭館に犯人の取調べを申し入れる^{三一}。しかし、倭館においては蘭出・打擲事件が解決していない状況であったため、館守・吉田彦右衛門は「若し表向吟味掛僉議及数日二候ハ、極而様々差障りも可有之^{三二}」と考え、早々に吉蔵らの帰国を申し付けた。事件発覚から四日後、犯人の高島長左衛門下人の吉蔵、下代・幸助、大工・隼助、木挽・辰五郎の四名は縄下のまま対馬へ帰国した。

正徳元（一七二一）年の「辛卯（交好）約条」では、交好事件を起こした日本人についても行為の状況に応じて死罪や流罪が適応されることとなった^{三三}。約条に照らせば厳罰を受けるはずの吉蔵らであったが、朝鮮御用支配は彼らの処分を「田舎差下、旅行及び城下の厳原府中への上府の差し止められる^{三四}」とした。この理由を、朝鮮御用支配は「直ニ有体ニ申出候を以、外向之掛合等手入無之^{三五}」と、吉蔵らが自白したことと朝鮮との交渉を避けられたためとした。このことから、対馬藩においては、約条で処罰を重く定めている交好の行為であっても、関係者の自白などにより朝鮮との交渉に至らず解決できた事件については寛容に受け止めていたとみられる。

倭館において同時期に発生した打擲事件と交好事件についての対馬藩の裁許を比較してみると、打擲事件は結果的に犯人が自白しないまま死亡したことが館守らの落ち度として厳しい処分が下された一方、朝鮮人女性との交好は大罪であるにも関わらず朝鮮との交渉に発展しなかったために関係者の処分は軽いものであった。朝鮮御用支配は、事件の内容そのものよりも、解決に至るまでの過程を重視していたとみられる。

次に、天明六年の打擲事件をめぐる朝鮮との間でどのようなやり取りが交わされたのか具体的に見るため、館守・吉田彦右衛門に対する朝鮮御用支配の裁許内容を検討する。天明七年二月に差控を命じられた館守・吉田彦右衛門であったが、翌三月には正式に館守を罷免された。朝鮮御用支配は、館守役罷免の裁許のなかで、その理由を次のように述べた^{三六}。

【史料三】

館守

吉田彦右衛門

右者去年十一月九日東西館之下焚共二拾余人炭柴為催促坂ノ下江罷越小通事共居合不申候として設門を令濫出、剩へ右之内松岡判左衛門下仙之介・畑嶋安右衛門残下喜六と申者兩人村屋へ立入壳掛之朝鮮人を剥取候処、右之朝鮮人其節之打擲ニ而相果候付、①代死被差出度段翌々十一日外向方申掛候、右ニ付最初方掛合之次第条々手拔数々有之、②館守切ニ而取濟方何程茂可有之儀候処、其処之勘弁薄く爰元江書役を以伺越候、取斗方大成心得違方御手入と相成「と相成」始終之條々鋭細之儀逐一難拳、抑両国間御隣交ニ頼候御実意之重処を外向江能々令触通候様不得申貫、③罪状之不明白者折節令病死候を幸ニ外向之難決取治、剩其死驅守門外江曳出し外向之見分を請候段、此取斗ニ而者罪行不分明者を代死ニ差出し候同然之形状弊端不輕候、④況また両訳方御国方之御差図ハ如何ニ御座候哉与相尋候時者、ケ様ニ可相答段兼而被差図置候とも不相用、⑤只管外向当時之難決を免し候而已を以外向江之返答御国威を墮、御隣誼ハ御隣誼、御約條ハ御約條、御国威ハ御国威与申処之差別無之、言語道断之次第館守之職分を不相弁、所置大様不念不埒之勤方ニ候、依之此節館守役被差免差控之俟直ニ帰国被仰付候、此旨被申渡候、以上、

三月廿一日 年寄中

与頭衆中

今回の事件では、①打擲された朝鮮人が死亡したことを受けて、朝鮮側から犯人の日本人を「代死」にするよう求められたが、このときの館守・吉田彦右衛門による「掛合之次第条々手拔数々有之」ことが、館守の責任が問われる理由であったとみられる。そもそも倭館で起きた事件は、②「館守切ニ而取濟方何程茂可有之儀候」と館守の裁量で解決することが求められていたが、館守が対馬国元に館守書役の久光市蔵を帰国させて、朝鮮御用支配の指示を仰いだことも問題とされた。本来、倭館での事件を両国の交渉に発展しないように円滑に解決することが館守の職務であると捉えられていたとわかる。

両国の約条において、打擲や殺害事件を起こした日本人に対する処罰の規定はなかったが、【史料二】で朝鮮御用支配が「後弊与申内中ニも重キハ人命ニ拘候筋」と認識していたように、被害者の朝鮮人・秋心徳が死亡したために、朝鮮側が犯人の日本人の処罰を要求する事態となったとみられる。この状況において、③館守は詮議中に死亡した喜六の死骸を倭館の守門外において朝鮮役人に検分させた。こうした館守の対応は「罪行不分明者を代死ニ差出し候同然之形状」であり、朝鮮御用支配は倭館が朝鮮の要求に応じた形になるため「御国威」に関わると考えたようである。

このように、天明六年の闖出・打擲事件は、倭館と東萊府の役人のみで事件を処理することができず、対馬藩の朝鮮御用支配が関係者を帰国させて裁許を下す結果となった。本来であれば、館守の責任で倭館で起きた事件が日朝両国の交渉に発展しないよう対応しなければならぬと対馬藩庁は考えていたが、実際には朝鮮役人から④「御国方之御差図ハ如何ニ御座候哉」と国元の差図まで尋ねられる事態となっていた。

朝鮮御用支配は、倭館の事件が誠信の弊害となることを危惧し、館守・吉田彦右衛門を事件の処理に手拔りが多く、却って両国の交渉を引き起こしたとして罷免した。事件そのものではなく、倭館での事件の処理に関して朝鮮側が介入し、これを館守が断りきれなかったこと

を「御国威を墮」としたとして問題視したのである。朝鮮御用支配・古川図書は、吉田彦右衛門の後任として館守経験のある戸田頼母を任命して朝鮮との交渉にあたらせた。

第三章 闖出・打擲事件への朝鮮の対応

先述したように、今回の事件では、倭館統括を担当する東萊府使らを通じて、打擲事件を起こした日本人の厳罰を求めるなど事件の処理をめぐり朝鮮役人が介入する場面が生まれた。一方で、この事件については、東萊府使を通じてソウルに報告され、朝鮮国王や官僚らが対応を議論することとなった。本章では、事件の発生を受けて、東萊府使など現場の朝鮮役人がとった対応とソウルの朝廷における議論の実態を検討し、倭館における事件に対する朝鮮側の認識を見ていく。

第一項 開市の停止

まず、事件の発生に伴い東萊府が倭館に対して行った「撤市」について見ていくこととする。撤市とは、毎月決められた日に開催する開市を、東萊府使の裁量または上級官庁の備辺司における審議のうえ中止することを指す。天明六年の事件発生以前にも、倭館の日本人が闖出など事件を起こした際に倭館との交渉を有利に進めることや、倭館の統制を目的として開市を停止する措置がとられた^{三七}。開市では、東萊府の許可を受けた朝鮮人商人が倭館の開市大庁にて日本人と取引を行うものであり、市の停止は対馬藩にとって交易額の減少をもたらした。

今回の事件では、天明六（一七八六）年十一月十一日に訓導・別差が倭館に打擲された朝鮮人・秋応徳の死亡を報告したところ、倭館館守らは犯人の詮議に消極的な態度を示した。すると、十三日に開催される予定であった開市が「外向差支」を理由に中止される^{三八}。また、二十八日の開市も同様に中止となった^{三九}。

また、十二月朔日には、倭館の館門外で開かれる朝市も中止された。朝市は、倭館付近の朝鮮人らが参加して、倭館の日本人相手に魚や野菜などの日用品を商う場であった。朝市の中止を聞いた倭館からは、通詞・小田幾五郎が仮訓導・李同知にその理由を尋ねたが、李同知はその理由を知らないと答えている^{四〇}。打擲事件が解決しないことがその原因であったと推測される。倭館からは翌七年正月二十二日に喜六が詮議中に死亡したのち、開市の再開が要求されたが、東萊府使・閔台赫はすぐには再開が難しいと述べている^{四一}。

第二項 朝鮮における倭館の辺境認識

次に、朝鮮朝廷における事件関係者の処遇をめぐる議論から、朝鮮政府が事件をどのように問題視したか具体的にみていく。

事件発生から十日後の十一月十九日、東萊府を管轄する慶尚道觀察使・金尚集は、朝鮮国王・正祖に啓聞して、倭館の日本人が新草梁村の秋応徳を打擲し殺害したことを報告した^{四二}。慶尚道觀察使は、秋応徳が日本人との私的な取引において、本来禁じられているにも関わらず代金を負債としたことが騒動の原因と考え、「辺禁之懈弛」を理由に東萊府使・洪文泳と釜山僉使・閔百恒を罷免するよう国王に求めた。このため新たに東萊府使・閔台赫と釜山僉使・尹範行が翌月十日に赴任した^{四三}。

さらに、十二月十九日には、同じく慶尚道觀察使・金尚集の啓聞により、秋応徳の殺害について東萊府を通じて倭館館守を責諭すること命じる。また、「辺禁」すなわち辺境の防御が任務である設門將・文成豹、別差・崔昌謙は、倭館の日本人の闖出を防ぐことができなかったために処罰されることとなる。慶尚道觀察使は梟首を要求するが、実際には朝鮮軍官・左水營使によって倭館近くの設門で棍罪の後に追放刑とされた^{四四}。

このように、今回の事件は、倭館での詮議や東萊府との交渉では事態を収束することができず、朝鮮朝廷において関係役人の処分が議論

される問題に発展した。東萊府使ら朝鮮役人に、倭館館守らが行う詮議や犯人の処罰について介入する姿勢があったが、その背景にはこうした朝鮮朝廷における動きがあったとみられる。

事件の発生後、領議政・金致仁は東萊府使・閔台嶽の進言を引用して、清との国境である義州府に設けられた柵門と東萊府の倭館の守門近くの状況を比較して、次のように述べた^{四五}。

【史料四】

○戊申／次対。領議政金領議政金致仁啓言、東萊守臣言、灣府則柵門外一百二十里之内、一直陳廢、而萊府則自設門内、至守門外十里、司僕牧場田畝在焉、農民迭相出入、倭人則以禁標之内來往無禁、烏得無淆雜交通之事。一依灣柵、使不得起耕、恐合事宜。請依所請、俾嚴防限。從之。(後略)

東萊府使の意見によれば、義州府は柵門から百二十里までの間は荒廃した土地であり集落もないが、倭館の守門から設門までは十里もなく、設門のすぐ近くに朝廷の馬を管理する司僕寺の牧場や水田があるために農民が出入りをしている。設門より外への日本人の闖出は禁じられていたが、本論文でも見たとおりしばしば闖出行為が発生していた。東萊府使は、そうした倭館からほど近い場所に、朝鮮人民衆が入りする牧草地や耕地があることが日本人と朝鮮人の接触が起こる原因と考え、義州府を例にして、倭館の周囲に朝鮮人が立ち入らないようにすることを求めた。このように、倭館の日本人闖出とそれに伴う朝鮮人殺害の発生は、朝鮮朝廷において辺境の統制を強化する必要性が議論される結果を招いたのである。

金致仁の進言にみられるように、東萊府や倭館を日本に対する辺境の場と捉える考え方は、一七三八年に東萊府使・具宅奎が「邊禁解弛、多有作奸犯科者」と、辺境の弛みを統制する目的で進言した「邊門節目」にも表れている^{四六}。

朝鮮において辺境の関門を指す「邊門」のうち、倭館周辺は日本に対する辺境であった。「邊門節目」は倭館に出入りする朝鮮人役人の勤務内容や、一般の朝鮮人の行動範囲に関する三ヶ条の規定から成る。倭館内外の開市や朝市に関わる商人や、取引を監視する軍官、倭館に出入りする小通事など職務で日本人と接触する朝鮮人役人に対しては、「倭房買売者、一罪施行事」と開市大庁以外の部屋での交易は死罪と規定し、密貿易の温床となることを防いだ。また、新旧草梁村の朝鮮人の「出入設門及倭館西牆近処」は、日本人との接触による「奸濫之弊」があるとして、倭館周囲の伏兵幕に詰めている軍官に監視を命じている。邊門節目は、設門を設置した東萊府使・権以鎮の倭館統制を引き継いだものであるが^{四六}、その背景には倭館周辺を辺境の場として重視する朝鮮側の認識があったと考えられる。

第三項 「易地聘礼」交渉における倭館の弊害論

天明六年の事件と前後して、近世の日朝関係の転換点といえる「易地聘礼」交渉が開始された。易地聘礼とは、徳川家慶の將軍就任に際して派遣される朝鮮通信使を対馬島で接待すること、日朝両国の経済的な負担を軽減することを目的としたものであった。交渉の経緯については、田保橋潔氏^{四八}などの詳細な研究があるのでここでは言及しない。老中・松平定信の指示により朝鮮との交渉にあたった対馬藩であったが、相互に条件を譲らず折衝は難航した。そうしたなか、文化六（一八〇九）年七月朝鮮から訳官使・玄義洵らが対馬に来島し、対馬藩主宗氏、幕府目付・遠山左衛門と接見することとなった。訳官使の目的は易地聘礼が幕府の意思であることを確認し、具体的な聘礼の内容を協議することであったが、この交渉の機会に訳官使は倭館の弊害への対応を対馬藩に要求したのである。

訳官使の派遣に先立って朝鮮の左議政・金載瓚は、倭館の弊害

について国王に進言した。金載瓚は「館倭輩奸弊日滋」と日々倭館の日本人がもたらす弊害を除くために「於島主及江戸執政相對処、明辦痛説、則亦足為折奸祛弊之一助」になるとして、対馬藩主と幕府執政の前で倭館の弊害を論ずることで弊害を除く一助になると述べている^{四四}。金載瓚の進言により訳官使から対馬藩に提示された項目は七ヶ条あり、後に「己巳約条」として合意に至る。己巳約条の内容に詳細な検討を加えた尹裕淑氏によれば、中絶船貿易の撤廃、公作米輸入量の減少など対馬藩にとって利益減少をもたらすものであったが、易地聘札交渉を成功させることを第一に考えて朝鮮側の要求を受諾したとみられる^{四五}。

交易における弊害を列挙した己巳約条において、唯一倭館の統制に関わるものが「館宇西方、築垣設門」^五という条目である。倭館の西側に垣と設門を作ること要求する内容であるが、日本人の行動空間をさらに限定する目的があったとみられる。新たな垣と門の設置はなかったようだが^{五二}、約条によっても抑えることのできない倭館の日本人と朝鮮人の接触を防ぎ、辺境の防衛を固めたい朝鮮政府は、易地聘札交渉の場においてこうした倭館の現状を改善することを企図したとみられる。

おわりに

ここまで、天明六年に倭館で発生した日本人の闖出と朝鮮人の打擲・殺害事件について、具体的な処理過程と日朝両国の事件に対する姿勢を検討してきた。事件は、倭館に滞在する下働きの日本人が日用の柴炭支給を求めて闖出行為に及んだものだったが、その際に新草梁村に居住する朝鮮人を打擲して死亡させたことにより、事件の処理は倭館と東萊府の間で解決できず、国王に啓聞され朝廷の審議に上げられる問題となった。当初、倭館の館守・吉田彦右衛門らは、詮議による関係者の処罰に消極的であったが、開市の停止や犯人の日本人の処罰の要求など朝鮮側の事件の処理に対する態度は厳しく、「外向掛合」す

なわち朝鮮との交渉に発展してしまったため、対馬藩の朝鮮御用支配も事態を重く受け止め、館守の罷免など関係者を処罰するに至った。朝鮮御用支配が危惧したのは、倭館における事件の処理がこじれて日朝誠信の弊害となることであった。朝鮮御用支配らは、倭館での事件は倭館館守と東萊府使の間での解決が望ましいと考えていたが、今回の事件では朝鮮朝廷において議論がなされ、東萊府使をはじめ、訓導・別差ら倭館を出入りする役人が処罰される事態を招き、その影響は小さくないものだった。

朝鮮朝廷は、東萊府の倭館周辺を日本に対する辺境と捉え、日常的な倭館の日本人と周辺の朝鮮人の接触を防ぐため、設門の設置や「邊門節目」の制定等により両国人の生活空間を分離してきた。対馬藩との交渉を経て、倭館周辺での日本人の行動範囲を規定した「癸亥約条」や、朝鮮人女性との交好にを処罰する「辛卯約条」を定めて、事件が起こった際には約条の規定を適用しようとしたのである。

東萊府は、事件の処理をめぐってたびたび倭館に対して開市や朝市といった取引の場を停止する手段をとり、約条に基づく犯人の処罰を倭館館守に求めた。しかし、対馬藩はこのような朝鮮側の要求を承諾することは「御国威」に関わると考えたため、事件の犯人を速やかに対馬に送還する対応を取ることで、倭館内で事件を収束させようとしたとみられる。

こうした対馬藩の姿勢は、朝鮮側にとっては倭館の統制を妨げるものと見なされたのであろう。天明年間に始まった朝鮮通信使の対馬での聘札に関わる日朝交渉の場において、朝鮮から渡海した訳官使は倭館の弊害を除くため「己巳約条」を示して、対馬藩にその承諾を迫った。朝鮮側は、倭館における弊害を対馬藩主や幕府目付の前で議論することを企図し、幕府と対馬藩が要請する易地聘札を進めるかわりに、倭館の統制に関わる交渉を行おうとした。朝鮮側が倭館における弊害として挙げた「己巳約条」には、倭館の西側に新たな垣や門を設置する要求がみえ、朝鮮側が日本人と朝鮮人の接触によって倭館周辺の辺境が脅かされることを危惧していたとわかる。

一方で、朝鮮政府は日本人の関出の背景について、倭館に支給する
 柴炭の不足が原因であることも理解していた。倭館の日用品は、支給
 品と朝市などの朝鮮商人との取引品で賄っていたため、倭館に在館す
 る日本人にとっては生活に関わる支給品の遅れを催促するための関出
 であったとみられる。朝鮮御用支配は「下焚共之内両国之御制禁を心
 得驕傲放恣之所為」(史料二)と、下働き者らの行動を非難しているが、
 こうした行為が事件につながるため、倭館における日朝関係を考察す
 るうえで在館者の事件との関わりを検討が必要だと考える。今後の課
 題としたい。

注 釈

- 一 中村栄孝『日鮮関係史の研究 上』吉川弘文館、上巻一九六五、中、
 下巻一九六九。
- 二 森克巳「近世に於ける対朝鮮密貿易と対馬藩」『史淵』四五、
 一九五〇、四九一七三頁。
- 三 田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、一九八一、田代和生『倭
 館―鎖国時代の日本人町』(文春新書)文藝春秋、二〇〇二、
 田代和生『新・倭館―鎖国時代の日本人町』ゆまに書房、二〇一一。
- 四 金東哲(訳・金尚會)「十七〜十九世紀の釜山倭館周辺地域民の生活
 相」『年報都市史研究』九号、二〇〇一、九三―一〇〇頁。
- 五 孫承詒「倭人作拏謄録」을 통해 본倭館(倭人作拏謄録)を通し
 て見た倭館」『近世朝鮮 朝日関係研究(近世朝鮮の朝日関係研究)』
 国学資料院、一九九九(初出一九九三)。
- 六 장순준 「조선 후기倭館에서 발생한 朝日양곡인의 물리적 마찰 실태
 와 처리」(朝鮮後期倭館において発生した朝日両國人の物理的摩擦実
 態と処理)『韓國民族文化』三一、二〇〇八、六九―一〇一頁。
- 七 尹裕淑『近世日朝通交と倭館』岩田書院、二〇一一。
- 八 「邊例集要」卷十一、己丑五月条 韓國国史編纂委員會編『韓國史料
 叢書 十六』一九七〇所収。
- 九 拙稿「都市的空間としての近世草梁倭館」『都市史研究』一、
 二〇一四、八八一―一〇三。
- 一〇 前掲、尹裕淑『近世日朝通交と倭館』。

- 一一 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門)(国立国会図書館所蔵) 天明六年
 十一月十一日条。
- 一二 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月十八日条。
- 一三 「分類記事大綱」三三「和館制札一件」(国立国会図書館所蔵)。
- 一四 「正祖実録」二二(ソウル大学校奎章閣所蔵、正祖十年十一月十九
 日条。
- 一五 長正統「路浮税考―肅宗朝癸亥約条の一考察」『朝鮮学報』五八、
 一九七一、一一二〇頁。
- 一六 「分類記事大綱」三三「和館制札一件」。
- 一七 「正祖実録」二二、正祖十年十一月十九日条。
- 一八 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月十二日条。
- 一九 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月十三日条。
- 二〇 田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、一九八一。
- 二一 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月十七日条。
- 二二 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月二十日条。
- 二三 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月二十八日条。
- 二四 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月二十八日条。
- 二五 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明七年正月二十二日条。
- 二六 「天明七丁未年交好一件」(朝鮮方)(韓國国史編纂委員會所蔵)。
- 二七 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月十八日条。
- 二八 「天明七丁未年交好一件」(朝鮮方)。
- 二九 「天明七丁未年交好一件」(朝鮮方)。
- 三〇 「正祖実録」二三、正祖十一年正月二十九日条。
- 三一 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十二月二十六日条。
- 三二 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十二月二十八日条。
- 三三 前掲、尹裕淑『近世日朝通交と倭館』。
- 三四 「天明七丁未年交好一件」(朝鮮方)。
- 三五 「天明七丁未年交好一件」(朝鮮方)。
- 三六 「天明七丁未年交好一件」(朝鮮方)。
- 三七 김광일 「撤供撤市의 予(撤供撤市の研究)」『韓日関係史研究』五三号、
 二〇一六、二〇一―二一三頁。
- 三八 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十一月十三日条。
- 三九 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十二月二十八日条。
- 四〇 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十二月朔日条。
- 四一 「正祖実録」二三、正祖十一年二月十日条。
- 四二 「正祖実録」二二、正祖十年十一月十九日条。
- 四三 「倭館館守日記」(吉田彦右衛門) 天明六年十二月十日条。
- 四四 「正祖実録」二二、正祖十年十二月十九日条。

- 四五 「正祖実録」二三、正祖十一年二月十日条。
四六 「邊例集要」卷五、戊午五月条。
四七 梁興淑「조선 후기 왜관 통제책과 동래 지역민의 대응」(朝鮮後期倭館統制策と東萊地域民の対応)、『歴史와 (と) 世界』三七、二〇一〇、一〇五—一四六頁。
四八 田保橋潔「朝鮮国通信使易地行聘考」、『近代日鮮關係の研究(下)』朝鮮總督府中枢院、一九四〇。
四九 「純祖実録」十二、純祖九年五月十二日条。
五〇 前掲、尹裕淑『近世日朝通交と倭館』。
五一 「邊例集要」卷十八信使、庚午七月条。
五二 前掲、尹裕淑『近世日朝通交と倭館』。